ミリンダパンハーに於ける霊魂説について

玉　井　　威

Milindapañhā に於て霊魂乃至実体を意味する語には、vedagū, jīva, puggala, satta 等があげられるが、中でも vedagū がこの意味で用いられた例は、本書独特であり他に例を見ない。以下、vedagū を中心に検討を加えていきたい。

本書五四頁には、vedagū は abbhantare jīva（漢訳は「身中命」大正三二、七一二b）と同一視されている。この abbhantare jīva が身体内にあつて、それが感覚器官の如何にかかわらず、対象を自由に知覚すると王は理解する。即ち王はこれを以て認識の主体となし、その実在性を認めんとしたのであるが、かかる王の見解に対して、ナーガセーナは諸法の倶起することによつて知覚の生ずる次第を説明し、「そこに vedagū は認められない」(p. 56) と明言している。

abbhantare jīva なる語も本書に特有なるものとされているが、本書の他の箇所には王の臣下の見解として、jīva が abbhantare vāyo（内部に於ける風）即ち息として出入りするという形で示されていたり (p. 30)、bhūtasmin jīva（生類に於ける霊魂）が慧や識と共に認識主体とも考えられ易いことが説かれているが (p. 86)、これらも abbhantare jīva と synonym と考えてよいであろう。

また Sammohavinodanī (p. 356ff) では、abbhantare attā という

類似した表現が見られ、Abhidharmakośabhāṣya (ed. by Pradhan, p. 469etc) には、antar-vyāpāra-puruṣa（内用士夫）が説かれている。これらもやはり身体内に存する霊魂と考えてよいであろう。

vedagū については、PTS辞書によれば、vedagū の suffix-gū は √gam, to go からきており、going, having gone (through), being skilled or perfected in を意味すると言う。この -gū は veda- のみならず、anta-, pāra- 等につき、それぞれ極に達せる人、彼岸に到れる人を意味する。従つて vedagū は文字通りには、ヴェーダの達人とか智慧を完成した人（智者）とかの意味で、即ち仏を指す。この様な意味での vedagū は、既に Suttanipāta 等の原始経典のうちに散見せられるものである。しかし、その意味での vedagū が如何にして本書の如き霊魂を意味するに至つたかは明らかではないが、Edgerton はBHS辞典の中で、Suttanipāta の中で用いられている vedagū が、Mahāvastu で vedaka に Sanskritization されている例を示している。そこでは vedaka が智者を意味している訳である。更に BHSkt. には、同じ vedaka に経験者、受者等の意味もあることが知られる。この意味での vedaka は、kāraka（作者）と対で用いられる場合が多い。普通 Skt. で作者、受者を意味する語は、kartṛ, bhoktṛ で、例えば倶舎論 (AK. p. 476) では、それを業の作者、業果の受者ということで、ātman と同じ様な意味で用いる勝論の主張が引かれている。一方、パーリでも kāraka, vedaka が作者、受者の意味で対に用いられた例は、Visnddhimagga (p. 578, p. 610) 等で見出され、そこでも我 (attan) と同一視せられている。kāraka, vedaka の語は初期の原始経典には見られないが、Rhys Davids 夫人によれば (The Milinda-Questions, p. 31)、

vedaka はそれより古い用語で、Kathāvatthu (p. 47) にあらわれる paṭisaṃvedin に相当すると言う。Kathāvatthu 註 (pp. 29-30) では、それが vedaka 或は paṭisaṃvedaka の語で説明されている。そこで本書で言うところの霊魂としての vedagū は、それの文字通りの意味であるヴェーダの達人、智者との関連よりも、むしろ受者、経験者の意味の vedaka との関連が深いと思われる。受者、経験者としての意味が実体視され、霊魂を意味するに到ったのであろう。

vedagū に関する問答は、更に本書七一頁にもなされている。即ち、vedagū は認められるかと言う王の問に対し、ナーガセーナは「勝義によっては、vedagū は認められない」と答えている。問答はこれだけで終っており、先程の問を簡単に繰返したにすぎないように思われるが、本書の註釈書である Milinda-ṭīkā (p. 16) によると、「この問は前に問われたのに、何故に再び問われたか」として、「前の問は、jīva-vedagū に関して問われた」とし、この場合は「バラモン・ヴェーダの達人等と言われた puggala-vedagū に関して問われた」と註釈している。ここでは二種類の vedagū が考えられている。即ち、前問では jīva としての vedagū つまり霊魂を問題とし、この問ではヴェーダの達人即ちバラモンを意味するとみていたようである。これは前述の如く、原始経典中に散見せられた文字通りの意味の vedagū と本書に独自な用法である霊魂の意味の vedagū とを語っている訳である。

従来、本書のこの箇所は、前問に於ける vedagū と同様、霊魂の意味に解されてきたが、次の諸点から、註釈の解釈の方が正しいと考えられる。まず第一に、前問を再びここで繰り返すことの不合理なる点、第二に、前問では「そこに vedagū は認められない」として、vedagū の存在を積極的に否定していたが、ここでは「勝義によっては (paramatthena) 認められない」として、条件をつけて、その存在を否定している点である。「勝義によっては認められない」とは、世俗 (sammuti) として、或は言葉 (vohāra) として、仮に vedagū を認めることを許す立場なのであって、本書の他の箇所で、puggala (p. 28) や satta (p. 268) が「勝義としては認められない」と説かれているのと軌を一にしていると考えられる。従って、この場合の vedagū は puggala としての vedagū と見るべきであろう。因みに、漢訳は前の vedagū を「人」(大正三二、七一二b) 或は「常主」(大正三二、七一三a) と訳し、後の vedagū を「有智」(大正三二、七一五c) と訳している。これによると漢訳者も後の vedagū を veda 即ち最高智を持てる者という様に理解して、「有智」とした如くである。

更に Milinda-ṭīkā は vedagū の存在の仕方について「然るに長老は、存在による非存在なるものの施設 (vijjamānena avijjamānapaññatti) に関して、大王よ勝義によっては、vedagū は認められないと言ったのである」と述べている。ここで言う存在の施設の仕方は、Puggalapaññatti-Atthakathā (pp. 171～2) や Abhidhammatthasaṅgaha (pp. 39～40) に於て説かれたところの六の施設の一であるが、vedagū を霊魂の意味に解するならば、六施設の一つ、非存在なるものの施設 (avijjamānapaññatti) に入る訳であるが、註釈の言う如く、ヴェーダに通じた人の意味に理解するならば、ヴェーダ即ち最高智は存在と考えられるけれども、それに通じた人は非存在であるから、「存在による非存在なるものの施設」と言われたものと考えられる。(以下省略)